

成田委員長のよさと限界

昭和四十三年十月五日、政調会長時代に、「東京新聞」に執筆した人物論「硯滴」に収録。
のち加筆訂正して『巨薺芥考』にも収録

消息筋によると、成田君は委員長になることを終始固辞していたという。勿論、だれが委員長になろうと、今日の社会党の再建は容易な仕事ではない。成田君は、それだけに先ず党の結束を計ることが至上の課題であるとして、みずからが委員長にならない方が得策であるとの考えに立っていたようだ。

ところが、先月の大会の経過と結果は成田君の願望が不毛に終わり、社会党はみずからの体内の人事的対立の深さを天下に暴露してしまった。成田君としてはまことに本意のことであったろう。しかも、今次の大会はその彼に党の指揮をゆだねることになった。

成田君は、私と同じく香川県の名門出身であり、高松中学から旧制四高を経て東大の法科という恵まれたコースを順調にたどった。東大卒業後三井にはいり、終戦の時には

三井化学の文書課長であった。その後政界入りをしたのだから、いわゆる組織の出身者ではない。海千山千の闘士でもなければ、赤貧洗うような苦勞もしていない。いわば誠実で平凡なホワイトカラー出身の理論家である。その成田君が、党の書記長として立派に名声と実績をあげ、先般佐佐木委員長と共に書記長を辞してから後も、成田委員長待望の声が燃焼を続けていたのは、ほかならぬ成田君のクセのない誠実さと、理論的節操のもつ魅力といえよう。

社会党はここ数年來、各地区、各選挙区を通じて停滞が続き、衰退の兆が見え始めていたが、今次参議院選挙ではついに大敗を喫した。とりわけ意外なことは、大都市における退潮が目立ったことである。これにはいろいろの理由があげられ、且つ究明されている。労組に依存してあくらをかき、議員のモラルの低下は不祥事件の連座者さえ出すに至ったこと、派閥の対立と結束の弛緩、日常活動や政策のPRの不足が見られたこと、その他いろいろの原因があげられている。

しかし、多くの論者が指摘するように、最大の原因はなんといつても市民社会の構成が多様化し、政治に対する欲求と不満が多岐になってきたのに、社会党がそれらの情勢に的確に対応できず、それらの不満を十分吸収できなかった

たことだと思つ。もとより、このことは言うに易く行なうに難いことである。そういう情勢への対応力や不満の吸収力については、独り社会党ばかりでなく、自民党もまた責められるべきである。ただ自民党は、政権をあずかる立場にあるので、事態の流動的な変化には、否応なしに対応しなければならなかつた。もとよりその対応は十分の計画性とか展望をもつたものではなかつたが、ともかくも対応してきた。ところが社会党はそうではなかつた。

社会党は、客観情勢の変化に直面しながら、みずからの教条の下にかたくななまでに硬直化し、柔軟性を失つていなくなつたとはいえないように思つ。極端にいうと、教条には誤りはないが、事態の方に誤りがあるとでもいいたいような風情が見られないではなかつた。勿論、みずからの信奉する教条をみだりに掲げたり下げたりすることは、政党にとつて自殺的である。その意味において本来政党というものには「非寛容」な組織ではある。しかし非寛容は独善であつてはいけない。国民あつての政党であるからである。

私は、成田君を誠実な理論家として尊敬している。そして彼は終始社会党の教条を最も忠実に守り、且つ主張してきた。そのこと自体立派ではあるが、そこに客観情勢の変化に歩調を合わせる柔軟性が認められなかつた。そこに社

会党と成田君のよさもあれば限界もあるように思われてならない。

国内では、市民社会の構成の多極化を反映して、多党化の傾向は動かしがたいものとなりつつある。同時に各勢力のいたずらな対立によつては解決し得ない新たな問題が、雨後のたけのこのように生起してやまない状況である。そして政治の無能力が厳しく問われている。自民党も社会党も、その共通の仕事として、政治の対応力を取り戻さなければならなくなつてきている。

世界自体も、各陣営を通じて多極化し、イデオロギーを越えて、各民族国家がその生存と安全の道を個性的に追求しだしている。ナシヨナリズムは再び往時の勢力を回復しつつあるかに見えるが、その背後には、核エネルギーの制御というような人類共通の課題が巨姿を現わしてきた。

こついつ変化に背を向けていては、自民党も社会党も、その首み自体が政治にはならないのである。私は成田君が優れた多くの同志の英知とエネルギーを結集動員して、弛緩の色を濃くした党内各派を本流に集め、その愛する社会党の新時代に即した脱皮と飛躍のため、全力を傾けられることを期待してやまない。それはひとり日本社会党のためばかりでなく、日本の政治全体のためでもあるからだ。